

二〇〇一年度総合文化研究所活動報告

公開シンポジウム

主催 総合文化研究所

「二十一世紀のカリブアテンアメリカ音楽—五月二十八日
東琢麿（音楽評論家）、石橋純（宇都宮大学助教授）、
杉浦麿

主催 総合文化研究所
後援 イタリア文化会館

「現代世界と剥き出しの生—G・アガンベンを囲んで—
十二月二十一日
ジョルジョ・アガンベン（ヴェローナ大学）
市野川容孝（東京大学）、岡田温司（京都大学）、上村忠男
西谷修 和田忠彦

連続公開講演会

主催 総合文化研究所

後援 国際言語文化振興財団
「文化は都市を結ぶ—大きな戦争—から第二次世界大戦へ—
六月十四日、七月二六日、全七回
増田義郎（東京大学名誉教授）、小池滋（都立大学名誉教授）、
河島英昭（本学名誉教授）、松山巖（評論家）、篠原琢、
川口健一、荒このみ

公開講座

主催 総合文化研究所

「世界の都市、その知られざる肖像」
十月四日、十一月十五日、全七回
谷川道子、亀山郁夫、大高保二朗（早稲田大学教授）、
八木久美子、水野善文、小林二男（工藤光一）

「アジアの表象文化—伝説芸能篇—
十月九日、十一月十二日、全七回
奥平龍二、宇戸清治、岡田知子、菊池陽子、
石井和子、川口健一、川島郁夫

国際シンポジウム

主催 イタリア学会

後援 総合文化研究所
「国際ルネッサンスシンポジウム」十一月十六日、十七日、十八日

マリアンヌ・レデレル教授講演会

主催 大学院地域文化研究所

後援 総合文化研究所
国際言語文化振興財団

「同時通訳者の条件—二〇〇二年一月二十八日
—EUIにおける同時通訳の意義と現状—」一月三〇日

編集後記

「総合文化研究」第5号は、「南西アジアの文化と文学」の特集を中心として、投稿論文と書評より構成されている。二〇〇一年九月二日の「北米大陸」に起こった空前の惨事が、いきなり、「アフガニスタン」問題を軸として「イスラーム世界」の問題と結合されるという情勢を受けて、当初は、特集号でも、この周辺地域に関わる研究者として何らかの対応を示すべきであろうとの意見も拝聴した。しかし、結局、亀山所長のお許しを得て、この事態に対して特集号としての直接的な態度表明をすることは控えた。現実の事態との距離の取り方は執筆者各人におまかせすることとした。世情騒然として、憶測飛び交う中、特集部分の執筆者の皆様には、極く限られた期限内で執筆をお願いしたにもかかわらず、ほぼ締め切りどおりの御寄稿をいただいた。執筆者各位に心より感謝する次第である。

特集の内容は、ヒンドゥーイズムとイスラームが関わる南、西アジア地域の文学と文化を扱った論考と翻訳であるが、本特集では、わが国ではあまり読者の目に触れる機会がない分野である「中央アジア」に関する文化研究のプレゼンスも出せればと考えた。「南西アジア」には通常含まれない「中央アジア」地域を敢えて取り込むため、チャガタイ・トルコ語関連で菅原睦氏に執筆をお願いし、氏から快諾を得られたことは幸運であった。また、タジク語関連でも島田氏からは留学先のタシケントから原稿をいただいた。結果として、本学の総合文化研究所ならではのユニークな内容の特集号となった。

表紙画は、アラブ文学の奴田原氏私蔵の絵画を利用していただいた。「南西アジアの文化と文学」は、才能あるアラブ人画家の抽象画を表紙画に得て、特集号としての「顔」を持つことができたわけである。奴田原氏のご好意に感謝するとともに、本来なら編集の中心となるべき奴田原氏の代役を務めた者として、氏の芸術的感性をこうした形で本特集号に生かすことができたことは大いなる喜びである。

迅速に進められた編集作業であったが、経歴豊富な吉本秀之氏のアドヴァイスをいただき、実質的に編集を担った岸井紀子、福岡由仁郎、栗山陽子の皆さんに大変お世話になった。皆さんのお陰で最終段階にこぎつけることができた。ここに、吉本、岸井、福岡、栗山の四氏に、心から、ねぎらひの言葉をおくりたい。最後に、本特集号の出版も、国際言語文化振興財団のご支援の賜物であることをごに記し、謝意を表したい。

（藤井守男）

